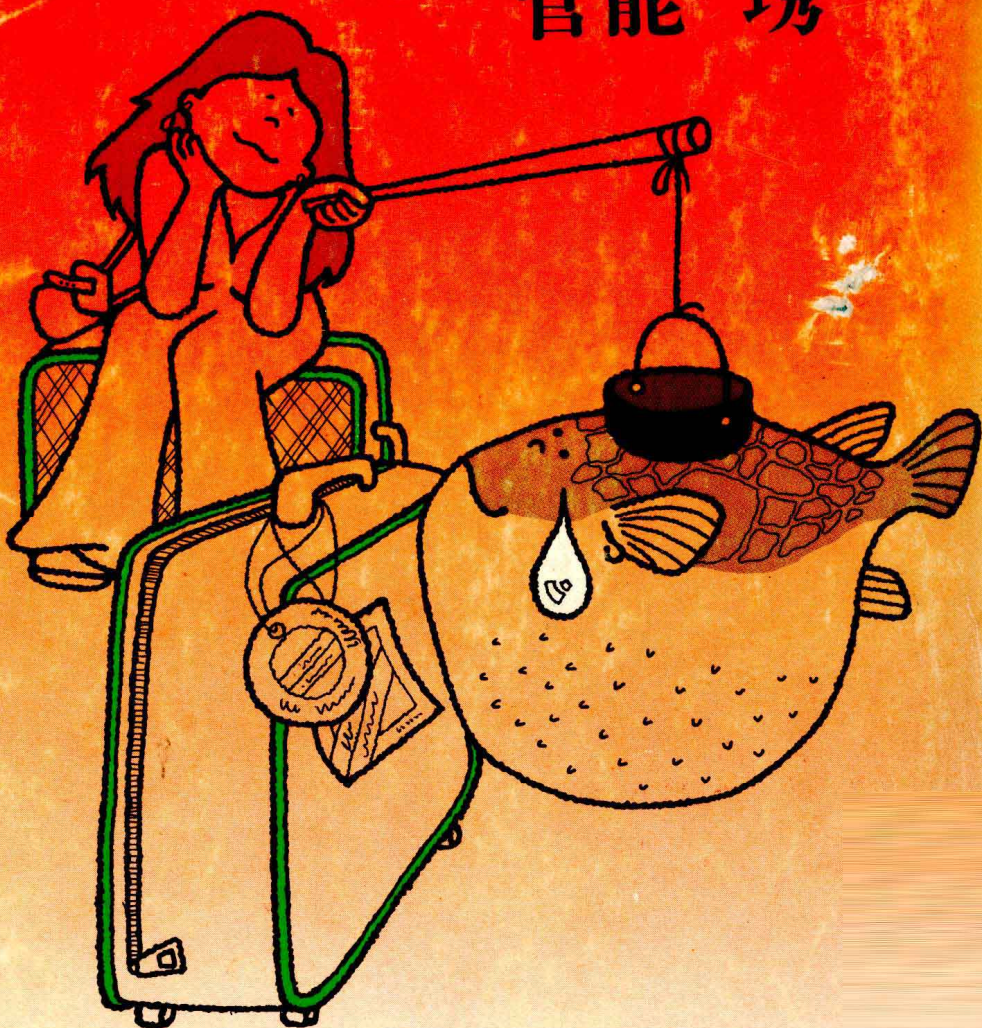


# モノドンの グッバイ 恋のふぐちょうちん

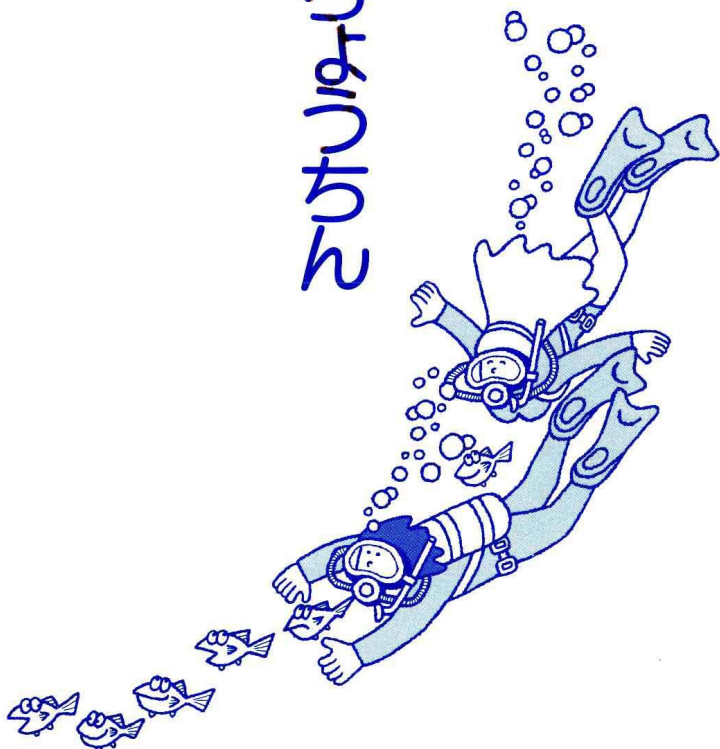
菅能 琇一



モノゾンの

# グッバイ恋のふちやふちやと

二瑠



モノドンのグッバイ恋の  
ふぐちようちん

定価 七八〇円

昭和五十三年八月二十五日 印刷  
昭和五十三年九月五日 発行

著 者 菅能琇一かんのしゅういち

編集人 高杉治男

発行人 高原富保

発行所 毎日新聞社

〒一〇〇 東京都千代田区一ツ橋  
〒五三〇 大阪市北区堂島  
〒八〇二 北九州市小倉北区紺屋町  
〒四五〇 名古屋市中村区名駅

印刷 東京ベル印刷 製本 正文社

0095-506132-7904

モノドンの  
グッバイ恋の  
ふぐちようちん

目  
次

西海岸ウエストコーストから来たジエニー 7

六本木のイングリッシュ・イーター 20

九十九里浜シュウジュウリの旅鳥 34

サンゴが燃えた島で 55

グルニオンの恋 74

海底で見せた勇氣 97

鉄火場ジエニー 122

手づくりのふぐちょうちゃん 132

“FAR FROM THE MADDING CROWD” 145

シラノ・ド・サーファー 166

ウミホタルの心が光る 173

さよならジエニー 203

あとがき 214

装幀・イラスト／清水良子

モノドンのグッバイ恋のふぐちょうちん



ウエスト・コースト  
西海岸から来たジェニー

私がジェニーに会ったのは、十年ほど前の五月。春には珍しく、湘南の海が台風なみに荒れた日曜日だった。

江の島に近い鵜沼海岸には、沖をゆっくりと移動する低気圧が送り出す厚いうねりが、幾重にも重なって押し寄せていた。前夜の天気図で波が出るのを予測して、私は、朝五時から、浜に出ていた。

空はほぼ雲に覆われていたが、日の出間近の浜は、明るかった。前夜吹いていた北風は止み、今日はどちらに吹くのか、まだ決めかねたように、浜の空気は、冷えた朝もやを含んで重くたれこめていた。

私は、サーフボードを波打際に下ろすと、息をついた。重さ十五キロ、長さ二百六十五センチ、今流行のミニボードとくらべ、はるかに大きく重い手製の、おそらく国産第一号のサーフボード

だった。当時、ハワイ式の本格的な波乗りは、日本ではまだ始まったばかりで、サーファーの数は、ぬれた小指の先につけた砂粒の数ほどに少なかった。

家から浜までは、歩いて三十分。十五キロの板をかついで歩くのは、ちょうど手頃なウォーミングアップだった。

松林の路地をくぐり、ドライブウェイを横切り、小さな砂丘を越えて海辺にたどりつくころには、全身は、すでに一泳ぎした後のように、汗でぬれていた。ボードの上にかがんで、すべり止めのワックスを塗ると、まるでそのり具合を試すように、汗の玉が、鼻先から落ちて、ワックスの上をころころと走った。誰の思いつきか、スキーならすべりを良くするワックスが、サーフボードでは、海水をはじいて、ボードと素足との摩擦を高めて、すべり止めの役目を果たすのだ。

朝早く波乗りに出かけたのには、訳があった。一刻も早く、一時でも長く焦る気持もなくなはないが、大きな理由は、波形にあった。

前夜の天気図上の低気圧は、東海沖をゆっくりと北東に進んでいた。ということは、関東を低気圧が通り過ぎれば、やがて風は、南から西へと回る。それはアップショアーウィンド、つまり沖風で、沖から来たうねりの波頭を吹き崩して、泡立った巻波に変えてしまう。波乗りのためには、風は、オフショアーか、せめて無風か弱いアップショアーでなければならぬ。

北の風は、夜半には弱まり始めていた。とすると、翌朝、遅くとも昼過ぎには、風は南から西

へと回るにちがいない。しかも低気圧が遠ざかれば、うねりも衰えるだろう。となれば、形の良いうねりを捉えるには、早朝しかない。

私の読みは、ほぼ当たっていた。いよいよボードを漕いで沖に出た時には、すでに海上の大気は、かすかに岸に向かって流れ始めていた。朝もやが、少しずつうすれ、東の雲の切れ目に、淡い茜色がさし始めた。

夜明けの静けさの中で、一人、小さな板にまたがって浮かんでいると、はるか沖をゆっくりと移動する低気圧の息づかいが、伝わって来る。彼らの送り出す波は、決して一様ではない。西洋の古地図の風神が、ほおをふくらませて海面に息を吹きかけているように、大波の一団が、一息ついてはやって来る。

のっぺりと屈いだ海原を、風神の鼓動のような小さなうねりが脈打ち、ボードの鼻先をひたひたと打って通り過ぎる。

数分、時には数十分の間をおいて、やがて水平線上に、かすかに濃淡のひだが、現れる。一度目をそらすと見失いそうな変化だが、数分後には、幾重にも重なるまぎれもないうねりとなって近づいてくる。

その時も、水平線上に点々と浮いていた漁船の影が、ふっと消えた。来たな、と沖を凝視する。と見覚えのある濃淡のひだが、しだいに鮮かに浮かび上がった。やがて最初の波が、数十メートル先に迫って来た。高さ三メートルほどのうねりが、沖を向いたままの体を、ゆっくりと持

ち上げる。頂で首をのぼすと、やや大きさを増した二番波の裏に、さらに、四、五、六、と階段のように高さを増して、うねりが続いている。

捕える波を六番目に決めて、三、四の波をやりすごして沖に出る。五番目の波の、まさに崩れようと白波立ち始めた頂を、板の先で切り裂くように突き抜けて、波の裏側に出ると、すでに六番の波は、二、三十メートル先に近づいている。高さは、四メートルはありそうだ。

波の速さと、立ち上がりの位置を読んで、板の位置を補正する。うねりのすそが、板の端にかかったところで、体をひねって板を岸に向け、そろそろと水をかく。波のすそが、板を後端から、ゆっくりと持ち上げ始める。その瞬間をとらえて、全身の力を二本の腕に集めて、一気に水をかいた。

体の下で、海面が次々にせり上がり、やがて板は、あたかも鞭打たれていた馬が、己の意志で駆け出すように、手でかく速さとは別の新たな勢いを得て、すると波の斜面を走り始めた。

テイクオフノ

両腕で板の先端を押さえ込んで立ち上がる。体を振り、板の向きを変え、腰を落とすと、板は、いよいよ垂直に立ち始めた波の壁を、切り裂くように斜めに走った。

めくれ上がる水の壁は、板をはね上げようとする。体重を前に移して、浮き上がる板の鼻を押さえ込む。波乗りは、波力と重力の狭間の、数十秒間の駆け引きだ。頭上から包み込もうとする波の壁の細いひだが、板の腹を打って、ぱりぱりと音を立てた。

波のすべてが轟音とともに白くなったところで、波乗りは終わる。私は、崩折れる波より一瞬早く、体をひねって板を波の裏側にプルアウトさせると、再び板に腹這いになって沖に向かった。数回、大きい波を捕えた時、雲間から朝日が射した。もやが晴れ、澄んだ大気をくぐり抜けた朝日が、むき出しの首や腕に、優しいぬくもりを与えた。

碎ける白波の向こうに横たわる砂浜に、散歩の人影が、動き始め、波音に混って、犬の鳴声も聞こえた。やがて、波乗り仲間が数人加わり、定置網の浮きのように、黒い影が、点々と波間に浮かんで連なった。

洋上の低気圧は、予報よりも足を早めたようだった。すでに房総の東に去ったのだろう。昼ごろになると、うねりは弱まり、風は、予想どおり南から西へと回って、しだいに強くなった。低いうねりは沖風になぎ倒され、巻波に変わって水底の砂を巻き上げた。

もう、波乗りの波ではない。見切りをつけて岸に上がった私は、吹き上げる風に追われながら、板をかかえて砂丘をかけたがった。

その時だった。登りつめようとした私に向かって、反対側から人影が、突進した。あやうく板ごと身をおかわすと、相手も跳びのいて、足をとられてひざまずいた。

外人の女性だった。灰色の砂を背に、海には場違いな萌黄色のジャンプスーツが、鮮かだった。「失礼」

とっさに謝る私に、

「ゴメンナサイ」

彼女は、片言でわびながら、顔にかかった髪をはね上げた。が、あらためて驚いたように、大きく目を見開いて口に手を当てた。二十二、三だろうが、やや長めの髪に包まれた顔は、額が広く面長で聰明な感じを受けた。口元のおどけなさからは、二十前にも思えた。

緑色の目が、不自然なほど長く、私とサーフボードの間を往来している。

「どうかしたの」

「ゴメンナサイ」

ぶしつけに見つめ過ぎていた自分に気がついたのである。また彼女は謝った。

「まさか、こんなところでサーファーに会えるなんて思わなかったものだから……」

と、はにかむように微笑んだ。

「驚くのも無理はないさ。日本では、今始まったばかりだもの」

「そうなの」

彼女は人なつっこい笑顔でうなずいた。私は、その素直さにつられて、名前を名乗った。

「よろしく、私の名は、シェニー、シェニー・S」

「S？」

犬の名に似た姓だった。だから聞き返したわけではないのだが、彼女は、日本ではよく笑われ



るけど私は人間の女よといたずらっぽく笑って手を差し出した。マニキュアも何の細工もない、素直に伸びた手を、そっと握り返すと、彼女は、その手をくっつと引いて立ち上がった。背丈は私とほぼ同じだが、高い腰からすらりと伸びたジャンプスーツのすそが、彼女をより大きく見せた。

「君も波乗りを？」

「いえ、私はいつも見るだけ」

「ハワイから？」

「いいえ、西海岸、西海岸」

「じゃあ、まさに波乗りの本場じゃないか」

「もう離れて十カ月になるわ。ね、座ってもいいかしら、風が強いのに」

肩にかけていたバスタオルを、砂に敷くと、ありがとう、と半分を私のために空けて座ったが、続いて座ろうとする私に、

「あらっ」

と彼女は声をあげた。

「サーファーは、どこでも同じね」

「何が？」

「これ」